

第17回環境ボランティアリーダー海外研修報告書

NPO 法人海の森・山の森事務局 豊田直之

1. ドイツは決して遠い存在ではなかった

「そうか、ドイツの人たちはその先に地球の姿をみて生活しているんだ」

私が今回のこの研修で行き着いた結論はそこにありました。環境先進国ドイツ。ふだん環境に関する事業展開で、いつも我が国・ニッポンに住む国民の環境に対する意識の低さを目のあたりにしてきた私には、何がドイツ国民と違うのか。それが今回の研修の最大の課題でした。

ここであえて原発の是非を問うつもりはありませんが、環境活動を行なうリーダーとして、東日本大震災時の福島原発事故後の世界に向けてのドイツの原発全面撤退宣言は衝撃的なできごとでした。なぜ、我が国・ニッポンが世界に先立ってその宣言をできなかったのか。その宣言をするのはドイツではなく、ニッポンであるべきだったんじゃないか。かつての戦争で兵器という原子力に広島・長崎とさんざん痛い目に遭わされて、そしてさらに世界最先端とされていたニッポンの原子力テクノロジーがもろくも崩壊した。大きな地震や津波という想定外のことが起きたにせよ、ことが何か起きれば稼働中のエネルギーを何もコントロールできない。いくら原子力の利用が効率のよいとされるエネルギー政策であったとしても、そこに住む人たちの生活の安全が担保されず、コントロール不能な暴れん坊の側面も持ち、しかも使用後の燃料の処理が地球環境に長年にわたって悪影響を与え続ける。そのことに気づき、一番痛い目に遭ってきた我が国・ニッポンが、なぜ世界に向けて原発撤退宣言をすることができなかったのか。ニッポンには、その提言をできる環境リーダーが存在しないのか。

今回のドイツへの旅は、ドイツそのものも私にとっては初めての地であり、そもそもこの歴史あふれるヨーロッパの地を訪れるというのも人生初の経験でした。まるでトンビに油揚げをさらわれたかのように思ってしまったドイツの原発全面撤退宣言、そして環境に配慮した暮らしを提案し続けているという印象が伝わっていたドイツ。何が決定的にニッポンと違うのか。それを見つけることこそ、私がニッポンの環境ボランティアリーダーの一人となるべく研修であると、私はこの旅を位置づけていました。

ドイツにおいて研修の日々を送るにつれ、いろいろなことが見えてきました。ドイツの国としての、または州としての、そして街中でふつうに行なわれてい

るいくつかの環境政策を見守り、必要とあらば積極的にその政策に対して口を出して、国の環境政策自体を見直させるチカラを持つ NABU（ドイツ自然保護連盟）や BUND（ドイツ環境保護連盟）といったどちらも会員数 40 万人 50 万人規模の巨大な環境 NPO 組織の存在。小さな頃から森や大自然の中で保育する「ようちえん」の存在。コウモリの保護やカエルの保護、コウノトリの保護といった地域に完全密着した環境保全活動がありとあらゆるところで展開されていました。また今回の研修の本拠地となったマインツ市ひとつを例にとっても、市役所の出先機関であるインフォメーションセンターが街中に設置され、そこではいかに省エネを施すかという術やゴミをいかに減らすかなどの情報提供や、必要によっては個別相談まで受けられる。必然的に国民一人一人が環境に対する意識を高められる。そして、なぜ自分たちが環境に配慮した暮らし方をするのか。それは単に今を生きる自分たちだけのことを考えているのではなく、自分たちの子どもたち、またその孫といった、この先もドイツで暮らすであろう人たちに、少なくとも今のドイツの環境をそのまま受け継ぐ。つまり少なくとも今ある地球環境を自分たちの末裔にも引き継ぐ責任意識がそこに存在するといってもいいのかもしれない。

環境問題も単にゴミの分別程度で満足している我が国・ニッポンの環境に対する意識は、決してこの先の地球を見ているのではなく、単に自分たちの家の中もしくは庭先程度のことしか見ていないレベルであると言えるでしょう。ここが決定的なドイツとニッポンとの違いであると痛感しました。では、ドイツとニッポンとの環境意識の格差は決定的で、もう追いつけないほどの水を空けられてしまっているのでしょうか。けっしてドイツとの環境意識のレベル競争をしなさいという話ではなく、ドイツにできていることが、ニッポンではできないとは私には思えないのです。例えるなら、マラソンでドイツがニッポンよりも 100 メートル先を走っている。けっして追いついて追い越すことが簡単ではない距離であり、状況であるにせよ、相手の背中が遠目ながらも見えている。諦めずに走り続ければ、そしてなんらかのペースアップできる要素が揃えば追いつき、うまくすれば追い越せる。そんなイメージじゃないかと感じました。

2. ありのままに、アリのままに

今のニッポンの環境問題を、そして国民の環境意識を改善するためには、おそらく教育そのものの改革や経済や税制の改革など、まさにニッポンの国としての根幹となる部分の改革が必要であると考えています。つまり、国の中枢神

経の配列構造そのものを変えて行くのですから、国としての存亡がかかっていると言っても過言ではないと思います。

ここでひとつだけ誤解のないようにしておきたいのは、ドイツは国や国民としてけっして特別なことをしているわけではないことです。端的に言うならば、これから先もありのままの地球でいて欲しい、そのありのままの地球に自分たちが暮らしたいという素直な気持ちをいろいろなところで貫いている。そして、国民一人一人がしっかりと意見を持ち、意見する。ただそれを日々行なっているということかもしれません。

とはいえ、ニッポンにおいては、まさに前述のような大手術というか、超抜本的な改革が必要だと考えています。だからといって、何をすればいいのかという方法論や方向性は私にはまだ見えていませんが、ひとつ言えるのは「アリであれ」ということではないでしょうか。

アリはご存知のようにとっても小さな虫です。でも、自分の数百倍もの大きさのセミや、数千倍もあるようなカブトムシの死骸をチカラを合わせて自分たちの巣に運びます。たった一匹では何もできませんが、数百匹、ときには数千匹の小さなアリたちがチカラを合わせればそれが運べてしまう。もちろんチカラを合わせることは必要でしょうが、アリたちは、その一匹一匹が触角を合わせて情報を共有したり、情報そのもののやり取りをしていると聞きます。これは何かを示唆していると言えないでしょうか？

一匹のアリ。それは例えるなら、ニッポンの各地で活動している環境ボランティアリーダーです。一人で国や地方自治体の環境政策に意見しようとしてもなかなかその意は届きませんが、それぞれがまたその背後に大きなバックグラウンドを有する人たちが集まり、それが10人、100人、それ以上となり、情報交換や情報共有してチカラを合わせて行動したとしたら……。もう私が何をお話ししたいかわかりでしょう。

ニッポン全国各地で日々活躍する環境ボランティアリーダー。彼らを集めて組織するさらにその上のリーダーがまずは必要であり、その下に全国各地のリーダーたちがいる。これはまさにドイツにおけるNABUやBUNDの組織構造に似ている姿と言えるかもしれません。けっして運営やその形態をNABUやBUNDに真似る必要はないと思いますが、国の政党の会員数とも互角に張り合えるようなバックグラウンドを持つ団体に成長して、国や地方自治体の環境政策をしっかりと見守り、必要なときに助言やたまには組織としての反対意見を述べられるような団体の存在こそが必要ではないかと考えています。率直に言うならば、私はこの研修の先に存在するリーダー会がその役割を果たすべきなのではないかと思っています。

3. ドイツを盗め!ドイツから盗め!

そういった大義を貫くためにまずは何が必要か。まず個々の環境 NPO や活動団体がしっかりと自立する必要があるでしょう。そういう意味では、私たちの NPO はまだ構造も脆弱で、経営はまったく安定していない状況です。今回の研修は、ドイツの NPO が、いかに多くの会員を獲得しているか、どのように資金を調達しているのか、そのための広報活動の実態や地域社会との連携の実態をじかにみることでした。そのことで、自分の NPO の抱えている問題点が何であるかを分析し、その規模の違いは雲泥の差があるかもしれませんが、理想的な運営が行なわれているドイツの NPO。その根底に渦巻くサクセススパイラルを見つけ出せば、必ず抱えていた問題解決につながると思います。その意味では、今回のドイツで見聞きしてきたようそのひとつひとつは、まさにその問題点を浮き彫りにしてくれたと考えています。

このドイツでの研修から帰国して何をすべきか。私は、NPO の運営の基本に立ち返り、まずは寄付金集めと会員獲得の戦略を練って実行しようと思っています。ふだんやっているようで、実は大事なエッセンス的なアクションが行なわれてきていなかったという気付きがありました。例えば、現会員やすでに寄付してくださった方たちへの感謝の意を示すことと現在行なっている活動情報の共有です。そして「こんないいことをしている NPO なんです」という広報ではなく、人々の共感を生めるような魅力的な活動の PR。人の心を動かすこと。そこに資金調達の原点があることを痛感しました。時代が悪い、景気が悪い、ちっとも寄付が集まらなると嘆くのではなく、今回の研修で学んだ資金調達、そしていい活動を行うための人材育成、そしてそれらすべてに対してよい回転を生み出すための広報活動。帰国後にやらなければならないことが山積しています。この研修の旅に参加できたことは、今後の私にとって、そして私たちの NPO の活動に大きな影響を及ぼすでしょう。

今回の研修は、毎日が好プレー、珍プレーの連続ではありましたが、まずはそのチームのみなさんに感謝いたします。そして、全国のセブン-イレブンの店舗で寄付してくださった方たちに感謝いたします。

以上